

今、宮沢賢治を考える

齋藤 宣裕

一、はじめに

平成二十九年の三月十一日をもって東日本大震災は七回忌を迎える。大震災の直後には日本全体が重く暗い雰囲気
に包まれていたが、その時に脚光を浴びたのが、被災地でもある岩手県出身の宮沢賢治であった。特に俳優の渡辺謙
氏が朗読した『雨ニモマケズ』の詩は多くの方の心に響いて話題となった。

周知の通り、宮沢賢治は法華経の熱心な信仰者であり、その作品には法華経の精神が息づいている。作品の中に息
づくその法華経の精神によって、東日本大震災で傷ついた多くの人の心が救われた部分があったのであろう。しかし、
あれから五年半が過ぎ、少しずつ東日本大震災の記憶が、そして宮沢賢治の記憶が薄れてきているように思われる。

毎日、数えきれないほどの事件や事故、自然災害などが起こり、少子高齢化、人口減少問題など多くの問題を抱え
て社会全体が不安定な状態にあるが、このような時代、このような時期だからこそ、宮沢賢治の作品、その思想や生
涯に学ぶものがあるのではないだろうか。本発表では宮沢賢治を「今」改めて考えることによって、我々の今後の教
化を考えてみたい。

二、宮沢賢治研究について

まずは宮沢賢治研究を振り返ってみると、賢治研究の初期時代においては、宮沢賢治を世に広めたいという熱意を持った人々による普及の時期であり、実弟である宮沢清六氏、草野心平氏などによって賢治が世に広められた。この時期には戦争という非常事態にも関わらず、社会に広く受け止められ始めたことが特徴である。また、『雨ニモマケズ』の詩が貧しさに耐える美德の象徴として国策に利用され、教科書に取り上げられることで広く世間に知られることになった。

次に一九五〇年代になると、恩田逸夫氏や佐藤勝治氏によって、賢治作品に対して客観的あるいは批判的な立場に立って研究が行われるようになる。そして一九六〇年代には宮沢賢治研究史において最も大きな論争ともいえる『雨ニモマケズ』論争が巻き起こる。これは『雨ニモマケズ』を高く評価していた哲学者の谷川徹三氏と、この詩を「ふと書き起こした過失のように思われる」と評し否定的な立場をとった詩人の中村稔氏との間で批判を合わせた論争であった。

その後、『校本宮沢賢治全集』の刊行を経て、没後五十年を迎える頃に宮沢賢治記念館が開館、「ヒデリ・ヒドリ論争」、一九九〇年には宮沢賢治学会イーハトーブセンターの設立、生誕百年を迎えた一九九六年頃の賢治ブーム、その後も研究雑誌やインターネットを通じて研究が進められてきた。

これまでの賢治研究における問題点として、文学的研究が主であり、不思議なほどに賢治と仏教、あるいは法華経信仰についての研究が避けられてきたということが挙げられる。その理由について正木晃氏は文学研究者にとって「仏教は難しくてよくわからない（中略）だから無視せざるを得ない」「文学研究者の多くは、文学が宗教と関わっている」という事実を認めたくない（中略）宮澤賢治に日蓮宗とか法華経信仰とか国柱会とかいうレッテルが貼られるこ

とを、ひじょうに嫌っている」と述べている。^①

私は平成二十八年、生誕百二十周年という記念の年に、宮沢賢治学会の研究発表会に初めて参加させていただいた。その中で岩手大学名誉教授であり、宮沢賢治学会イーハトーブセンター副代表理事をお勤めだった望月善次氏は「『御本尊』四題」というテーマでご発表になり、「賢治研究の今後を左右するものの一つは『妙法蓮華経』に関わる問題であろう」と述べておられた。今後は賢治の法華経信仰の側面からの研究が活発になることが期待される。

三、賢治の法華経信仰について

さて、賢治の法華経信仰について考える時、賢治が入会をしていた国柱会の存在が挙げられるが、賢治の生涯、その信仰について改めて調べていくにつれて、賢治は国柱会の思想、信仰とは一定の距離を置いていたことがわかる。

その根拠のひとつには、賢治の法華経信仰は国柱会を介したものであったにも関わらず、その思想に国体主義の思想が見えてこないということが挙げられる。大谷栄一氏は「賢治の法華経信仰には、国柱会と密接な関係があった一九二〇年代前半においても、智学の蓮主義の核にある国体観念の影響を見いだすことができない。」「『世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない』と宣示した『農民芸術概論綱要』（一九二六）にも、個人・国家・世界の救済を説く日蓮主義の影響が透けてみえるが、やはり、国家に対する視点が賢治には欠落しており、むしろその救済観は宇宙規模のスケールを持っている」と述べている。^②

もうひとつには、賢治と国柱会との関係が緊密ではなかったということがある。正木晃氏は「賢治が入会したころは、田中智學と大幹部の山川智應の間にあつれきがあつたらしく、内部で一種の権力闘争みたいなものが生じ、国柱会自体が分裂騒ぎという時期でもあつたようです。ちょうどそういう時期に入ってしまったこともあって、国柱会の内部にひじょうによそよそしい、冷たい空気が漂っていたのです。賢治はそういう雰囲気を感じて、詩に

うたっています。」と述べて、『国柱会』という詩の内容から、当時の国柱会の雰囲気、また実情に対して賢治が微妙な思いをいただいていたことを指摘している。

『国柱会』

外の面には春日うららに

ありとあるひびきなせるを

灰色のこの館には

百の人気配だになし

台の上、桜、花咲き

行楽の士女さざめかん

この館は冷え冷えとして

泉石をうち繞りたり

大居士は眼をいたみ

はや三月の人の見るなく

智応氏はのどをいたづき

巾巻きて廊に按ぜり

崖下にまた笛鳴りて

東へととどろき行くは

北国の春の光を

百里経て汽車の着きけん

この作品については、田中智学の孫にあたる大橋富士子氏が解説をしている。

陽春四月、戸外には麗かな春の息吹が響きあい、上野公園は花見客で賑わっているのに、灰色のような国柱会館には、まるで人の気配もない。

この館の内部は冷えびえし、外の庭も冷たい庭石がかこんでいる。会館の内外に、春なのに寒々しさが感じられる。ここに来てはや三カ月、智学大居士に一度も逢えぬのは、眼病のせいであろうか。

智応氏は風邪でのに包帯をして、考え事をしながら廊下を行き来している。何というもの淋しさであろう。

屋上庭園から上野の森を見ていると、真下に汽笛がまた鳴った。東にむかって轟々と行く汽車が、百里も遠い北国の早春の光をのせて、いま終点の上野駅に着くのだろう。^④

しかしながら、妹トシのお骨の存在もあってか、国柱会とは結局付かず離れずの関係を続けていたようであり、賢治は生涯にわたって脱会をしていない。このように、賢治は花巻で法華経と出会い、当時岩手県で盛んに布教されていた国柱会に希望を抱き、東京まで家出同然に出てきた。しかし、そこで見た国柱会本部の内情にいわば失望を覚えるのである。その後、賢治の作品が多く生まれてくることになるが、信仰という面ではおそらく賢治は独自の法華経

信仰へと舵を切つていったと想像される。

それでは賢治のたどり着いた法華経信仰とは一体どのようなものであったのだろうか。昭和六年九月二十日、上京してきた賢治は東京神田駿河台の宿にて急に発熱する。体調はかなり悪く、死期を悟った賢治は、翌二十一日に父母宛の遺書を書いた。この頃に書き始めた手帳こそが、有名な『雨ニモマケズ』の詩が記された手帳である。この手帳の内容こそが、賢治が人生をかけてたどり着いた信仰を表しているのではないだろうか。

この手帳は『雨ニモマケズ』の詩や五ヶ所に記された御曼荼羅が有名であるが、手帳の一ページ目には「当知是処 即是道場 諸仏於此 得三菩提」

三ページ目には

「諸仏於此 転於法輪 諸仏於此 而般涅槃」

という、妙法蓮華経如来神力品第二十一の経文が記されている。二ページ目には

「昭和六年九月廿日 / 再び / 東京ニテ / 発熱」

と記されており、手帳を書き始めた初期にこの如来神力品の経文を書写したことが伺える。つまり賢治はこの経文を大変重要視していたものと想像できるのである。

この経文は「そのような久遠の釈尊に教え導かれた諸の仏陀世尊は、どこで修行したかといえば、まさに今、仏陀が衆生とともに在るこの場所で、永い永い修行をなさったのであり、そして諸の仏陀はこの現実の世界でこの上なき尊いおさとり（無上等正覚）を体現なされたのであり、（さらにこの現実世界で教えを説いたのであり、ついにはこの現実の世界で涅槃にお入りになられたのである）」^⑤ という意味の部分である。

そして『雨ニモマケズ』の詩の中では周知の通り、常不軽菩薩の請願について表現されている。渡邊寶陽氏はこの解釈について「人々の苦悩の現実の前に、ただ『ナミダヲナガシ』『オロオロアルキ』ということしかできないで、

『ミンナニデクノボートヨバレ』るしかないと覚悟して、真理の実践の道に分け入ることを詩っているのである。こうした内容こそは、まさに常不軽菩薩の礼拝行そのものではないのか。どれほどの理想を立て、その実現を誓っても現実にはさまざまな困難がある。それに挫折してもならないし、また安住してもならない。それが常不軽菩薩の礼拝行なのだろう。そこにこそ仏教の示す深い請願の世界があるであろう。」^⑥と述べている。これらを合わせて考えると、賢治の法華経信仰が見えてくるのではないだろうか。

四、今、宮沢賢治を考える

ここで『雨ニモマケズ』をもう一度読んでみる。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニキテ
東ニ病氣ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ
北ニケンクワヤソシヨウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒドリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

今後、我々が社会から求められるのは、この『雨ニモマケズ』の精神、そしてこの現実世界での実際の行動ではないかと考える。詩の中に何度も出てくる「行ッテ」という言葉の通り、これからは寺院の中において来客をじっと待つのではなく、傷つくことを恐れずにとんどん社会へ、地域へと出かけていく。社会との交わりの中で、実際に行動をもって布教をしていく、そして法を説くだけではなく、行動で法華経の教えを示していくという姿勢が重要であろう。法華経の教えが文底に隠された賢治の作品がこれだけ世の中に受け入れられ、愛されてきたことは紛れもない事実であり、それは法華経の教えが現代の人々の心に響くのだ、人々を救うのだという証でもある。東日本大震災後の人々の心を救ってきた賢治作品の力と宮沢賢治の生涯を、今後はさらに布教に活かしていくべきであると考ええる。

そのためには今後、ますます仏教的観点、信仰的側面からの賢治研究が必要となるだろう。今後の課題としては、賢治の法華経信仰と国柱会の思想との関係の整理、『雨ニモマケズ手帳』の内容の研究、賢治の信仰した御曼荼羅の研究などがある。また、平成二十三年に行われた第四十四回中央教化研究会議では宮沢賢治がテーマとして取り上げられ、三原正資現代宗教研究所長の基調報告『イーハトヴと宮澤賢治』、また第一分科会の討議の中で賢治の思想とアメリカ仏教との共通点として「超宗派性」「平等性」「社会性」の三点が挙げられている。この点に関しても、今後研究が必要であろう。

五、おわりに

賢治は『農民芸術概論綱要』において「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い」「科学は如何短

かき過去の記録によって悠久の未来を外部から證明し得ぬ」「いま宗教は気休めと宣傳 地獄」、そして「われらの前途は輝きながら峻峻である」と記している。峻峻なる現状を乗り越え、輝く前途のために、宗教を温かく明るく存在へと変えていくために、「今」賢治を考えて「今」行動に移すことが重要であると考ええる。

【参考文献】

- 日蓮宗現代宗教研究所編『現代宗教研究』第四十六号、二〇一二年
- 天沢退二郎・金子務・鈴木貞美『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂、二〇一〇年）
- 渡邊寶陽『宮澤賢治と法華経宇宙』（大法輪閣、二〇一六年）
- 奥田弘『宮澤賢治研究資料探索』（蒼丘書林、二〇〇一年）
- 朝日新聞社文化企画局東京企画部編『生誕百年記念「宮澤賢治の世界」展図録』（朝日新聞社、一九九五年）
- ① 正木晃「宮澤賢治の仏教思想と復興の教化学」（日蓮宗現代宗教研究所編『現代宗教研究』第四十六号、二〇一二年、四十八ページ）
 - ② 天沢退二郎・金子務・鈴木貞美『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂、二〇一〇年）四三四ページ
 - ③ 正木晃「宮澤賢治の仏教思想と復興の教化学」（日蓮宗現代宗教研究所編『現代宗教研究』第四十六号、二〇一二年、四十二ページ）
 - ④ 宮沢賢治研究会編『文語詩の森 第二集』（柏書房、二〇〇〇年）
 - ⑤ 渡邊寶陽『宮澤賢治と法華経宇宙』（大法輪閣、二〇一六年）一七二ページ
 - ⑥ 同右 一八六ページ